

## 【報告】 看護基礎教育における動画教材を用いた学生教育への取り組み -教育への活用のための検証-

三上佳澄\*<sup>1</sup> 富澤登志子\*<sup>1</sup> 藤田あけみ\*<sup>1</sup> 扇野綾子\*<sup>1</sup> 工藤ひろみ\*<sup>1</sup> 太田一輝\*<sup>1</sup>  
因直也\*<sup>1</sup> 福岡幸子\*<sup>2</sup> 木村俊幸\*<sup>2</sup> 尾崎浩美\*<sup>2</sup>

(2024年2月11日受付, 2024年4月6日受理)

**要旨:** 研究目的は、作成した動画教材『感染対策』『瞳孔のアセスメント』の教育効果を評価することである。対象はA大学看護学生で、Formsでアンケート調査を実施した。視聴したデバイスは『瞳孔のアセスメント』はその他、『感染対策』はスマートフォンが多かった。知識習得状況について『瞳孔のアセスメント』は視聴直後が視聴1か月後より有意に高かった ( $p<0.05$ )。『瞳孔のアセスメント』は「教材の内容に満足したか」など、『感染対策』は「興味をひく内容であったか」などについて50%以上が「非常にそうである」と回答した。『感染対策』は「教材の時間は長い」と回答したものもいたが、「単調な内容だったか」などは50%以上が「全くそうでない」「あまり」と回答した。両教材は様々なデバイスで視聴でき、興味・関心をひく内容で、学生は満足したと考える。しかしながら教材の長さや興味・関心を維持できる内容を検討する必要性があった。

**キーワード:** 動画教材, 看護基礎教育, アクティブ・ラーニング, ARCSモデル

### I. はじめに

わが国では少子高齢社会に関連して、多くの課題が山積しており、改善に向けて様々な取り組みを行っている。このような状況下で、現存する問題だけでなく未来志向的に予想し、創造的に対処できる人材育成が急務となっている。医療系や技術系の専門分野で、段階的に学ぶことによって専門職の基盤が培われるが、演習や病院実習など経験的学習が多いとはいえ、一方向型講義が多く、自ら能動的に学び、問題解決的思考を育む機会は少ない。

2011年に文部科学省から「大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会最終報告」<sup>1)</sup>が出され、「専門職として能力開発に努め、長い職業生活においてもあらゆる場で、あらゆる健康レベルの利用者のニーズに対応し、保健、医療、福祉等に貢献していくことのできる応用力のある国際性豊かな人材養成を目指す」とし、大学教育における看護学教育の質保証として看護実践力の育成の重要性が述べられている。また「看護学教育モデル・コア・カリキュラム」<sup>2)</sup>や「看護学士課程教育におけるコア・コンピテンシーと卒業時到達目標」<sup>3)</sup>が示され、看護実践力を備えた人材育成について述べられている。これまでは講義形式で学生に知識を伝達し、授業時間外に演習や応用課題に取り組みせる方法が実施されてきたが、主体的に学び、考える力

を養う方法としてアクティブ・ラーニングが注目され、知識の定着や活用能力を高める効果があると期待されている。臨床での実践効果を高めるためのリアルな教育、学士教育—卒業教育を一連の過程として系統的かつ継続的な教育を行っていくことが臨床実践能力の高い人材育成に不可欠であると考えられる。また教育効果のある教材は、臨床に即した内容であり、視聴の負担が少なく、繰り返し閲覧が可能であり、反転授業や予習・復習などに用途が広がり、コンテンツ作成の費用も考慮され、最新の知見をもとに作成されたものが望ましい。そこで卒前卒業の一貫した教育を目指しMoodle(世界標準のLMS(Learning Management System: 学習管理システム))の活用、繰り返し学習の促進、オーディオレスポンスシステムによる参加型授業の展開、反転授業のためのeラーニングの活用など、アクティブ・ラーニングを進め、クラウドベースの教育システムの構築に向けて教材開発、基盤整備を行ってきた。またCOVID-19の感染拡大の影響により、対面授業ではなく、オンライン授業の機会が増え、ますますクラウドベースの教育システムの発展が望まれる。我々は、学士教育—卒業教育に対応したアクティブ・ラーニングを支援するため、これまでにA大学医学部附属病院看護部または認定看護師、病棟勉強会で行っていた講義を録画し、動画教材を作成してきた。こうした教材の活用により看護学生が認定看護師、専門看護師による、より臨床に則した看護を学ぶ機会となり、専門性の高い知識を習得できると考える。しかしながら有効性や活用の可能性については、これまで検証されておらず、学部から卒業教育までの連続性のあるシームレスな教育システムを構築する上でも、評価、検証することは不可欠である。作成した教材を評価し、今後の学生教育への活用を検

\*1 弘前大学大学院保健学研究科  
Hirosaki University Graduate School of Health Sciences  
〒036-8564 青森県弘前市本町 66-1 TEL:0172-39-5948  
66-1, Honcho, Hirosaki-shi, Aomori, 036-8564, Japan

\*2 弘前大学医学部附属病院  
Hirosaki University Graduate School of Health Sciences  
〒036-8564 青森県弘前市本町 53 TEL:0172-39-5948  
66-1, Honcho, Hirosaki-shi, Aomori, 036-8564, Japan  
Correspondence Author k-mikami@hirosaki-u.ac.jp

討することは非常に重要である。よって本研究は、学部学生がより臨床現場に近い内容を主体的に学修するため、作成した動画教材の活用可能性と教育効果を評価することを目的とする。

## II. 研究方法

### 1. 対象者

A 大学看護学生 2～4 年生とした。

### 2. 調査期間

2021 年 11 月～2022 年 9 月

### 3. 調査方法

Microsoft 365 アプリケーションの 1 つであるアンケート作成ツールの Forms を用いて、オンライン上でアンケート調査を実施した。

研究の内容、倫理的配慮等を説明文書を用いて対象学生に説明し、アンケートの URL 等を記載している資料を配布した。動画教材を視聴後、Forms のアンケートに回答してもらった。その 1 か月後、知識習得の状況を確認するため、動画教材視聴直後と同様の確認のアンケートをメールで送付し回答を依頼した。

### 4. 調査内容

調査内容は、学年、年齢、動画教材を視聴したデバイス、視聴回数、視聴した時間帯などのほか、視聴しての感想についてのアンケート、動画教材視聴後の知識習得状況を確認するための知識確認のアンケートであった。動画教材の視聴は、個人でパソコンやスマートフォンなどを活用する場合や講義時間内で視聴する場合があった。

視聴しての感想の項目は、学習への動機づけを評価する ARCS モデルを参考に作成し「あなたにとって知っている内容だったか」「あなたにとって有益な情報は含まれていたか」「理解できたか」「満足したか」など 12 項目である。

知識習得状況を確認するため、小テスト形式で動画教材視聴直後と 1 か月後に知識確認を行った。問題は 5 問で構成され、動画教材に則した内容とした。

### 5. 動画教材

動画は『現場で活用するフィジカルアセスメント 瞳孔のアセスメントをしよう』（以下、瞳孔のアセスメントとする）、『感染対策の基本！～手指衛生と手荒れ対策のお話～』（以下、感染対策とする）の 2 コンテンツであり、どちらも A 病院の認定看護師による看護師を対象とした勉強会を撮影し、教材とした。『瞳孔のアセスメント』の動画教材は約 14 分、『感染対策』の動画教材は約 56 分であり、パワーポイントによる資料と勉強会時の説明がナレーションとなっている。

### 6. 分析方法

各項目については単純集計を行い、知識習得状況の確認は、1 問 1 点で 5 点満点とした。動画教材視聴直後と 1 か

月後の点数を Wilcoxon Signed-rank Test で比較した。有意水準は 5% 未満とした。統計解析には SPSS Statistics Ver.26 を使用した。

## 7. 倫理的配慮

研究協力の任意性、プライバシー保護、データの取り扱い、研究結果の公表、質問紙の記入に約 20 分を要すること成績評価等に影響が全くないこと等について文書で記載し、アンケートへの回答をもって同意が得られたものとした。教材視聴直後と 1 か月後の小テスト結果を比較することから、データは個人のメールアドレス等がわかる状態で収集するため、データは研究用の番号を付け、対応表を作成し、個人や施設が特定されないように留意した。

なお、本研究は弘前大学大学院保健学研究科倫理委員会の承認(整理番号：2021—026)を得て実施した。

## III. 結果

### 1. 対象者の概要

対象者は 2 年生 79 名、3 年生 80 名、4 年生 82 名であり、全てのアンケート調査に回答した者を対象者とした。『瞳孔のアセスメント』は 2 年生が 29 名、有効回答率 36.7%、4 年生が 3 名有効回答率 3.7%、『感染対策』は 2 年生が 23 名、有効回答率 29.1%、4 年生が 1 名、有効回答率 1.2%であった。3 年生は有効回答が得られなかった。

### 2. 動画教材視聴について

視聴した動画教材について、デバイス、回数、動画内容について表 1 に示した。視聴したデバイスは『瞳孔のアセスメント』はその他が多く、『感染対策』は、スマートフォンが多かった。その他は、スクリーンなどだった。視聴回数はどちらの動画教材も 1 回が多かった。これまでに動画教材の内容を学んだことがあるものが、『瞳孔のアセスメント』は「はい」と回答したものが多かった。今後動画教材として視聴するならどの時間帯がよいかは、どちらの動画教材も「授業時間内」が最も多く、ついで「休日などのプライベート時間」だった。

### 3. 知識習得状況

動画教材の視聴直後と視聴 1 か月後に知識確認のアンケートを実施し、その得点について表 2 に示した。

『瞳孔のアセスメント』『感染対策』ともに視聴直後は中央値が 5 点、視聴 1 か月後では『瞳孔のアセスメント』が 4 点、『感染対策』5 点だった。『瞳孔のアセスメント』は視聴直後の方が視聴 1 か月後より有意に高かった( $p < 0.05$ )。『感染対策』は視聴直後と視聴 1 か月後では有意差はみられなかった。

### 4. 動画教材視聴後の感想について

それぞれの動画教材視聴後の感想について表 3、4 に示した。『瞳孔のアセスメント』について「教材の内容に満足したか」「理解できたか」「授業の一部として使用したいか」は「非常にそうである」と回答したものが 50%以上であっ

た。「教材の時間は長い」は「全くそうでない」「あまり」と回答したものが90%以上であった。「単調な内容だったか」「知っている内容だったか」は「全くそうでない」「あまり」と回答したものが50%以上であった。『感染対策』について「興味をひく内容であったか」「有益な情報は含まれていたか」「情報をもとに実践できそうだと感じたか」「学習した実感はあるか」「教材の内容に満足したか」「理解できたか」は「非常にそうである」と回答したものが50%以上であった。「教材の時間が長いか」は「まあまあ」「非常にそうである」と回答したものは70%以上であった。

表 1 視聴したデバイス, 回数, 動画内容について

		(人)	
視聴したデバイス	瞳孔のアセスメント	パソコン	9
		タブレット	4
		スマートフォン	0
		その他	19
感染対策	パソコン	10	
	タブレット	2	
	スマートフォン	12	
	その他	0	
視聴回数	瞳孔のアセスメント	1回	28
		複数回	4
	感染対策	1回	20
		複数回	4
動画教材の内容を以前どこかで学んだことはありますか	瞳孔のアセスメント	はい	19
		いいえ	13
	感染対策	はい	12
		いいえ	12
今後学習として動画教材を視聴するならどの時間帯がよいですか。(複数可)	瞳孔のアセスメント	授業時間内	28
		休憩時間	3
		休日などのプライベート時間	9
		その他	1
	感染対策	授業時間内	18
		休憩時間	5
	休日などのプライベート時間	13	
	その他	0	

表 2 知識習得状況について

		Median(点)	p
瞳孔のアセスメント	視聴直後	5	0.014
	視聴1か月後	4	
感染対策	視聴直後	5	0.357
	視聴1か月後	5	

Wilcoxon Signed-rank Test

表 3 瞳孔のアセスメント動画教材視聴後の感想

	(%)			
	全くそうでない	あまり	まあまあ	非常にそうである
・この教材はあなたにとって興味を引く内容であったか	0	3.1	53.1	43.8
・あなたにとって有益な情報は含まれていたか	0	0	28.1	71.9
・これはあなたにとって単調な内容だったか	15.6	50.0	34.4	0
・これはあなたにとって知っている内容だったか	15.6	40.6	40.6	3.1
・1つの教材の時間は長い	25.0	65.6	9.4	0
・eラーニング教材を視聴するのは面倒か	0	53.1	46.9	0
・eラーニング教材を視聴してさらに学びたいと思ったか	0	9.4	59.4	31.3
・eラーニングの情報をもとに実践できそうだと感じたか	0	6.3	59.4	34.4
・学習した実感はあるか	3.1	3.1	50.0	43.8
・eラーニング教材の内容に満足したか	0	0	43.8	56.3
・理解できたか	0	3.1	43.8	53.1
・本教材を授業の一部として使用したいですか	0	0	43.8	56.3

表 4 感染対策動画教材視聴後の感想

	(%)			
	全くそうでない	あまり	まあまあ	非常にそうである
・この教材はあなたにとって興味を引く内容であったか	0	0	50.0	50.0
・あなたにとって有益な情報は含まれていたか	0	0	20.8	79.2
・これはあなたにとって単調な内容だったか	12.5	45.8	41.7	0
・これはあなたにとって知っている内容だったか	8.3	37.5	45.8	8.3
・1つの教材の時間は長い	8.3	20.8	45.8	25.0
・eラーニング教材を視聴するのは面倒か	8.3	41.7	50.0	0
・eラーニング教材を視聴してさらに学びたいと思ったか	0	8.3	70.8	20.8
・eラーニングの情報をもとに実践できそうだと感じたか	0	0	41.7	58.3
・学習した実感はあるか	0	12.5	37.5	50.0
・eラーニング教材の内容に満足したか	0	0	37.5	62.5
・理解できたか	0	0	37.5	62.5
・本教材を授業の一部として使用したいですか	0	4.2	54.2	41.7

## IV. 考察

### 1. 動画教材の活用の可能性

動画教材を視聴したデバイスは『瞳孔のアセスメント』はその他でスクリーンが多く、『感染対策』はスマートフォン、パソコンが多かったことから、さまざまなデバイスで自身の都合に合わせて視聴することができたと考える。令和4年度の個人のスマートフォンの保有率は77.3%<sup>4)</sup>、大学生のスマートフォンの保有率が90%以上であり<sup>5),6),7)</sup>、パソコンは50%以上<sup>8)</sup>とほとんどの学生がスマートフォンまたはパソコン、どちらかのデバイスを保有している。これらのデバイスで視聴をしていた学生が多数いたことから、これらの動画教材が学生個々に保有するデバイスで視聴が可能であることが考えられる。

また、ほとんどの学生が1回の視聴ではあったものの、複数回視聴している学生もいた。eラーニング教材は、学生が見たい時に、何回でも繰り返し学習することができるという利便性がある。本教材も複数回視聴していた学生もおり、学生の主体的な学修活動に活用できる教材であると考えられた。しかしながら、ほとんどの学生が1回の視聴であったことから、主体的な学修活動を可能にするために、どのような場面、状況で動画教材を活用するのか、目的、目標をより明確にすることで今後の活用に繋がっていくのではないかと考える。

武田ら<sup>9)</sup>は、学生実習における動画教材は学習者の自学実習を支援する補助教材として有用であり、電子教材が自己学習に好適であり、学習意欲をさらに高めると述べている。また本動画教材もまた、授業の補助教材の1つとして活用することで、より効果的に活用できることが考えられる。アクティブ・ラーニングの1つとして反転授業がある。反転授業とは、従来教室で行われていた授業学習と、演習や課題など宿題として課される授業外学習とを入れ替えた教授学習の様式であり<sup>10)</sup>、講義部分をオンライン教材として作成し授業時間外に予習させ、対面の教室では予習した知識・理解の確認やその定着、活用・探求を協同学習を含めたアクティブ・ラーニングで行う<sup>11)</sup>。本動画教材も繰り返し視聴可能で、スマートフォンやパソコンなど、さまざまなデバイスで視聴できることなどからも、十分に反転授業の教材として活用できることが考えられた。

### 2. 教育効果の評価

知識習得状況について、動画教材視聴直後と視聴1か月後の確認テストの合計点数を集計し比較した。『感染対策』は、合計点数が5点であり、有意差はみられなかった。『瞳孔のアセスメント』は視聴直後が5点、視聴1か月後4点で、視聴直後が視聴1か月後よりも有意に高かった。どちらの動画教材も、5点満点中4~5点と高得点であり、動画教材から学ぶことができたと考えられる。しかしながら知識の

定着の視点で考えると、『瞳孔のアセスメント』は定着できなかったことが予想される。松下<sup>12)</sup>は、学習サイクルの一部として、必要な知識を習得する内化とその知識の活用である外化が行われる必要があり、内化された知識は問題解決のために使ったりと、外化の活動を通じて再構築され、より深い理解になっていくと述べている。『感染対策』については、調査期間がCOVID-19の流行拡大に伴い、感染予防対策が行われていた時期であった。看護学生自身も関心がある内容であったこと、感染対策が日常的に行われていたことが、知識の定着に影響していたことも一因であったことが考えられる。

動画教材視聴後の感想について学習意欲の動機付けモデルであるARCSモデル<sup>13)</sup>をもとに振り返る。学習意欲を刺激・維持するという視点で教材評価をし、学習意欲にどのような効果があったのか、評価する。ARCSモデルは注意、関連性、自信、満足感で構成される。注意とは学習者の関心を獲得し、学ぶ好奇心を刺激・持続させることである。『瞳孔のアセスメント』の動画教材について、注意の側面で見ると「興味をひく内容であったか」は「まあまあ」「非常にそうである」と回答したものがほとんどであり、また「単調な内容であったか」「教材の時間が長いか」も「全くそうでない」「あまり」と回答したものが半数以上だったことから興味・関心を刺激され、維持できる内容であり、時間も適切な長さであったことが考えられた。

関連性とは学習体験が意義のあることだと信じられ、個人的ニーズやゴールが満たされることである。関連性の側面で見ると「有益な情報は含まれていたか」は「まあまあ」「非常にそうである」と回答したものがほとんどであり、「知っている内容だったか」が約40%、「視聴するのは面倒か」は「まあまあ」と約50%が回答したことから、学ぶ必要性を感じており、自分にとって有益であると捉えていたことが考える。しかしながら、知っている内容であり、面倒だと感じている学生もおり、学習者のニーズに合わせた内容の検討が必要だと考えられる。

自信とは学習者が成功、達成できると確信・実感するための助けをすることである。自信の側面で見ると「理解できたか」「実践できそうだと感じたか」「学習した実感があるか」は「まあまあ」「非常にそうである」と回答したものが90%以上だったことから、理解ができ、実践できそうだと感じ、自信につながったことが考えられる。

満足感とは学習者が学ぶ意欲を継続するために、達成感が得られることである。満足感の側面で見ると「内容に満足したか」「さらに学びたいと思ったか」は「まあまあ」「非常にそうである」と回答したものが多かったことから、満足感が得られた内容であったと考えられる。

『感染対策』の動画教材について、注意の側面で見ると「興味をひく内容であったか」は「まあまあ」「非常にそうである」と回答したものがほとんどであり、また「単調な

内容であったか」も「全くそうでない」「あまり」と回答したものが半数以上だった。しかしながら「教材の時間が長い」は「まあまあ」「非常にそうである」と回答したものが70%程度だったことから、興味・関心を刺激する内容であり、単調ではないものの、時間が長かったために興味の持続が難しかったことが考えられた。

関連性の側面で見ると「有益な情報は含まれていたか」は「まあまあ」「非常にそうである」とほとんどが回答しており、「知っている内容だったか」が約50%、「視聴するのは面倒か」は「まあまあ」と約50%が回答していることから感染対策を学ぶ必要性を感じており、自分にとって有益であると捉えていたことが考えられる。しかしながら、知っている内容であり、面倒だと感じている学生もおり、学習者のニーズに合わせた内容の検討が必要だと考えられる。

自信の側面で見ると「理解できたか」「実践できそうだと感じたか」は「まあまあ」「非常にそうである」と回答したものがほとんどであり、「学習した実感があるか」は80%以上だったことから、学習したことで、感染対策について理解ができ、実践できそうだと感じ、自信につながったことが考えられる。

満足感の側面で見ると「内容に満足したか」「さらに学びたいと思ったか」は「まあまあ」「非常にそうである」と回答したものが多かったことから、満足感が得られた内容であったと考えられる。

ARCSモデルは、学習者の注意が喚起され、自己の価値と授業の関連性が見いだされて学習がスタートする関連性と、やればできるという自信から学習意欲につながり、やってよかったという満足感によってさらなる学習につながる<sup>14)</sup>ことを基盤に提案されている。『感染対策』の動画教材は、注意、関連性の側面での検討が必要であると考えられた。

## V. 研究の限界と今後の課題

研究の限界として、本研究は対象数が少なく、学年も偏りがみられ、一般化はできない。今後は、動画教材の再検討を行いながら、活用方法について検討する必要がある。

## VI. 結論

作成した動画教材『感染対策』『瞳孔のアセスメント』について、学生教育への活用可能性と教育効果について調査し、以下の結論が得られた。

1. 視聴したデバイスは『瞳孔のアセスメント』はその他、『感染対策』はスマートフォンが多く、視聴回数はどちらの動画教材も1回が多かった。動画教材はスマートフォンなどさまざまなデバイスで複数回視聴することが可能であった。

2. 知識習得状況について『感染対策』は合計点数が視聴直後、視聴1か月後ともに5点、『瞳孔のアセスメント』は視聴直後が5点、視聴1か月後4点で、視聴直後が視聴1か月後よりも有意に高かった。どちらの動画教材も高得点であり、動画教材から知識の習得ができたと考えられる。

3. 『感染対策』は「興味をひく内容であったか」「有益な情報は含まれていたか」「教材の内容に満足したか」などについて「非常にそうである」と50%以上が回答した。『瞳孔のアセスメント』は「教材の内容に満足したか」「理解できたか」などについて50%以上が「非常にそうである」と回答した。どちらの教材も興味・関心をひく内容で、学生は満足を得ることができたと考えられる。

**利益相反** 開示すべき利益相反はありません。

**謝辞** 本研究の実施にあたり、快く調査にご協力いただいた皆様に心より御礼申し上げます。

## 引用文献

- 1) <https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000001vb6s-att/2r985200001vbk2.pdf> (2024-1-18)
- 2) [https://www.mext.go.jp/content/20230718-mxt\\_igaku-000030966\\_7.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20230718-mxt_igaku-000030966_7.pdf) (2024-1-18)
- 3) [https://www.mext.go.jp/content/20230718-mxt\\_igaku-000030966\\_8.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20230718-mxt_igaku-000030966_8.pdf) (2024-1-18)
- 4) [https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/statistics/data/230529\\_1.pdf](https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/statistics/data/230529_1.pdf) (2024-1-18)
- 5) 中村雅子, 福井正康, 杉山祥子: A 大学生の情報通信機器利用及びインターネット依存の実態について-男女比較から-. 福祉健康科学研究, 14: 87-92, 2019.
- 6) 稲嶋修一郎, 堀尾良弘: 大学生のスマートフォン使用におけるインターネット依存傾向と生活習慣との関係. 人間発達学, 10: 1-10, 2019.
- 7) 伊熊克己: 学生のスマートフォン使用状況と健康に関する調査研究. 北海学園大学経営論集, 13(4): 29-42, 2016.
- 8) 中村雅子, 福井正康, 杉山祥子: A 大学生の情報通信機器利用及びインターネット依存の実態について-男女比較から-. 福祉健康科学研究, 14: 87-92, 2019.
- 9) 武田直仁, 竹内烈, 春名光昌: 動画教材を活用した学生実習の実践と評価-自学自習を促進させるe-ラーニングシステムの実践に向けて-. 薬学雑誌, 127(12): 2097-2103, 2007.
- 10) Bergmann, J., Sams, A. Flip your classroom: Reach every student in every class every day. International Society for Technology in Education. 2012.
- 11) 森朋子, 溝上慎一: アクティブラーニング型授業としての反転授業(理論編). pp.1-13, ナカニシヤ出版, 京都, 2017.
- 12) 松下佳代: ディープ・アクティブラーニング 大学授業を深化させるために. pp.1-27, 勁草書房, 東京, 2015.
- 13) J.M.ケラー著, 鈴木克明監訳: 学習意欲をデザインする-ARCSモデルによるインストラクショナルデザイン-. pp.1-20, 北大路書房, 京都, 2010.
- 14) J.M.ケラー著, 鈴木克明監訳: 学習意欲をデザインする-ARCSモデルによるインストラクショナルデザイン-. pp.47-78, 北大路書房, 京都, 2010.

## 【Report】

# Efforts to Educate Students Using Video Materials on Basic Nursing Education: Verification for Use in Education

KASUMI MIKAMI<sup>\*1</sup> TOSHIKO TOMISAWA<sup>\*1</sup> AKEMI FUJITA<sup>\*1</sup>  
AYAKO OHGINO<sup>\*1</sup> HIROMI KUDO<sup>\*1</sup> KAZUKI OTA<sup>\*1</sup> NAOYA IN<sup>\*1</sup>  
SACHIKO FUKUOKA<sup>\*2</sup> TOSHIYUKI KIMURA<sup>\*2</sup> HIROMI OZAKI<sup>\*2</sup>

(Received February 11, 2024 ; April 6, 2024)

**Abstract:** This study aimed to evaluate the educational effects of video materials created for teaching nursing students. The participants of this study were nursing students at university. A questionnaire survey was conducted using online forms, and two types of videos, “Infection Control” and “Assessment of the Pupil,” were used. The devices used to view the videos were mostly others for “Assessment of the Pupil” and smartphones for “Infection Control.” Knowledge acquisition of “Assessment of the Pupil” was significantly higher immediately after viewing the videos than 1 month after viewing ( $p < 0.05$ ). More than 50% of the respondents answered “the content is of interest” and “the contents are useful information included” for “Infection Control” videos. For “Assessment of the Pupil” videos, >50% of the respondents answered “satisfied” and “understood the concepts.” Some respondents answered that the material was “too long.” More than 50% of the respondents answered “not at all so” or “not so much” for the monotonous content or knew the content. The videos could be viewed on various devices, and the content was interesting and engaging. The participants were satisfied with the contents. However, considering the length of video materials and content is required to maintain interest.

**Keywords:** Video Materials, Basic Nursing Education, Active Learning